

## 中村喜一郎のことなど

近頃明治22年出版の「堅牢染色法」という著書を読む機会があつて明治初期にヨーロッパから化学染料を導入し染色の新技术実地に研修した中村喜一郎の知見や経験に基づいての染色指導書であることが理解できた。先日著者に縁ある方からの依頼で本人の事績や周辺の関係の方々について調べてみると種々興味ある話が明らかとなり当時の科学者たちの体験や交流を覗うことができた。

幕末において西国諸藩特に薩摩や佐賀は各々独自に欧州文明の吸収に努めで佐賀では藩主鍋島直正の強力な庇護の下に嘉永5年理化学研究及び製造の部門として精錬方を設けたことが知られ頭人の佐野常民は各地から優れた人材を集めた中に京都の廣瀬元恭の時習堂という蘭学塾に学ぶ田中久重、石黒寛次、中村奇輔の3人は誘いに応じて相前後して佐賀に赴いた。

田中久重は「からくり儀右衛門」として機械職人で既に広く世に知られ、石黒寛次は長崎海軍伝習所で学びオランダ語に堪能で文久2年幕府遣欧使節に随行し、中村奇輔は京都大徳寺界限に住み化学者として有名であったと云われ、因みに子息の林太郎は田中久重の養子である。

彼らを含む精錬方は期待に応じて蒸気船、電信機、アームストロング砲などの製造に成功し佐賀藩は注目を浴びた。

中村喜一郎は奇輔の長男として嘉永3年(1850)京都に生まれ父の赴任先佐賀で育ったが14才のとき文久4年奇輔が火薬の実験中に爆発して失明するなどの事故があつた。しかし周囲の援助もありその後佐賀理化学学校や長崎オランダ語学校で勉学に努め23才のとき明治6年(1873)に佐野常民が率いるウイーン万国博視察団に随行し其の儘伝習生として翌年までドイツの染料会社やヨーロッパ各国の工場を巡り染色技術を習得し帰国した時化学染料約40種と媒染剤を持ち帰った。この時父奇輔と懇意であつた京都西陣の4世伊達弥助と一緒に行動したことは弥助の書簡にも彼の名が記されている。

国内では欧米文明の吸収を急ぎ京都でも榎村正直知事の命で京都舎密局が明治6年に設置され明石博高の下で産業振興政策が進展し明治8年に局内に染殿を設けて染色技術の向上を図ることになり初め伊達弥助に委嘱する話もあつたが帰国後病を得て死去したので明石博高は当時ヨーロッパから帰国し農商務省に勤務していた中村喜一郎を招聘して染色技師として明治14年舎密局廃止まで指導者の地位にあつた。その間河原町蛸薬師東に工場を設置して実地に染色を行った。明治16年東京に移り大蔵省印刷局に入った。その後山岡次郎の勧めで明治20年八王子染色講習所に招かれ明治28年八王子織染学校に改組され校長となった。更に明治33年新潟の十日町染織学校校長として赴任した。その後東京に戻り大正6年死去66才であつたがその一生を染色技術の向上発展に捧げたと言える。

中村喜一郎が京都在職中の明治初期の染色業界は天然染料からヨーロッパよりの化学染料への転換期にあたり使用簡便で色相鮮やかなことが関心を惹き得て拡大の兆が見えたが当初導入されたのは塩基性染料が主体で堅牢性に欠け使用者の技能未熟なこともあつて製品の品質不良が多発して問題化していた。染殿の開設はその対策の大きな理由であつた。彼が持ち帰ったのはアニリン染料とアリザリン染料とされているが前者はアニリンを後者はアンソラキノン原料とする染料で各種媒染剤との組合せで鮮明にして堅牢な染色が可能であることを強調して指導にあつた。彼は天然染料に対する知識が乏しかつたので逆に指導を請い研究したと言われる。新しい化学染料と染色技術の普及は思うようにならぬときもあり後年の著述でも

之を嘆くこと頻りであったがひとつの時代を担った重要な人物のひとりであったことが認められる。舎密局及び染殿は廃止されたがそこで育った多くの門下生は次の時代に活躍しその後の京都における染色業の発展に寄与した。

改めて250頁に及ぶ「堅牢染色法」を開いてみる。自序に発行の趣旨を述べ、本文は絹糸と木綿糸を化学染料及び天然染料の各々の原色及び配合色について媒染剤で下漬した後染色をして必要な后処理を行う処方をお個々について示した。付録に実施した染色見本を多く貼付した実用染色指導書である。本著に登場した堅牢な化学染料は以下の通りである。

- ・アリザリン レッド 帯青及び帯黄 20%液状品
- ・アリザリン オレンジ 20%液状品
- ・アリザリン ブルー
- ・アリザリン マルーン
- ・クルライン (セルリン) 緑色染料
- ・ガルライン (サルシン) 紫色染料
- ・アントラセン ブラウン 20%液状品
- ・ガルロフラビン (ゴールフラビン) 黄色染料 20%液状品

先に述べたように著者は明治7年にヨーロッパより持ち帰った約40種の化学染料の中から特に堅牢な染料を採り上げたのが上記の染料と考えられるが、ここでは価値を評価したり同定したりすることは敢えて行わない。形状には粉末と液状(泥状)のものがある。媒染剤は絹糸染色では醋酸クロムなど、木綿糸染色では醋酸盤土などを用いた。

特に藍及び藍染について頁を多く設けて藍玉と藍靛(藍草から純藍を精製し粉末にしたもの)の応用や特徴を解説し更に両者の利害得失を論じている部分は傾聴に値する。

明治以降繊維素材と化学染料は格段の発展を遂げ染色技術も進歩著しくこの指導書が現在も実用価値がある部分は少ないのは当然のこととして、堅牢にして鮮美なることが染色の本質であることを本著が強調したことは普遍の真理として今も変わらない。彼は上の著書に加えて「実地応用染色法」「内外折衷実地染色法」を上梓している。科学の歴史を振り返るとこのような先達を与えられた時代を歩いてきた軌跡のひとつを感慨をもって見た次第である。

平成25年7月 和田 弘 (色染・昭31年)